

TFC×TEL×RMC協働プロジェクト Sustainable Open Innovation Seminar
— 社会と知のフロンティアを拓く AI for Science — 第2回

AI for Scienceの政策動向

大阪大学 社会技術共創研究センター 特任准教授
工藤郁子

2026年7月21日 / 於・東北大学片平キャンパス



大阪大学 社会技術共創研究センター
Research Center on Ethical, Legal and Social Issues





工藤 郁子

Fumiko Kudo

- ・ 専門は情報法と公共政策
- ・ 共著に『AIと憲法』『ロボット・AIと法』『尊厳とAI・ロボット』等
- ・ 内閣府「AI制度研究会」構成員、経済産業省産業構造審議会知的財産分科会「特許制度小委員会」委員、文部科学省「AI for Scienceを支える研究データの管理・利活用と流通の在り方ワーキンググループ」専門委員、WG4 member, General-Purpose AI Code of Practice, EU AI Act など



生成AIめぐり規制と技術革新の両立目指す 新法案提出へ 政府

NHK(2025)「生成AIめぐり規制と技術革新の両立目指す新法案提出へ 政府」
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20250106/k10014685481000.html>

参議院

参考人
大阪大学社会技術共創研究センター
特任准教授

工藤参考人 工藤 郁子

参議院(2025)「憲法審査会」(2025年6月4日)
<https://www.webtv.sangiin.go.jp/webtv/index.php>

Today's Goal

「第7期科学技術・イノベーション基本計画」（令和8年3月27日閣議決定）の AI for Science に関する記述について、理解を深め、説明できるようになる：

近年、A I を科学研究に組み込む「AI for Science」が、創造性・効率性などの観点で科学研究の在り方に急速かつ抜本的な変革をもたらしつつある。

A I 駆動型研究を支えるオープンサイエンスを更に推進するとともに、我が国の強みを生かした分野横断的・組織横断的な「AI for Science」の実装により、日本全体で知の生産性を向上させ研究者がより創造的な活動に専念できる環境を実現するとともに、世界をリードする信頼性のある科学的成果を継続的に創出し、我が国の国際優位性・戦略的自律性を確保することで、自律性と信頼性を備えた研究国家として、AI for Science 先進国としての地位確立を目指す。

そのため、AI for Science の推進に向けた基本的な戦略方針も踏まえつつ、迅速かつ強力に取り組むことで、研究の効率性・生産性を向上させ、研究者の創造性を最大化させることが重要である。

Agenda

- AIとイノベーション
- AIと科学
- 科学技術政策としてのAI for Science
- AI for ScienceとELSI



AIとイノベーション

“近年、A I を科学研究に組み込む「AI for Science」が、創造性・効率性などの観点で
科学研究の在り方に急速かつ抜本的な変革をもたらしつつある”



NOBELPRISET I KEMI 2024 THE NOBEL PRIZE IN CHEMISTRY 2024



KUNGL.
VETENSKAPS-
AKADEMIEN

THE ROYAL SWEDISH ACADEMY OF SCIENCES

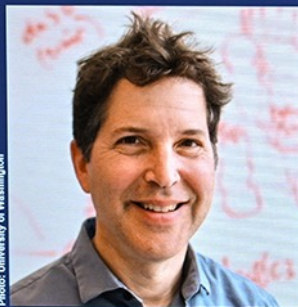


Photo: University of Washington

David Baker
University of Washington
USA

"för datorbaserad proteindesign"
"for computational protein design"



Photo: The Royal Society

Demis Hassabis
Google DeepMind
United Kingdom

"för proteinstrukturprediktion"
"for protein structure prediction"



Photo: BBVA Foundation

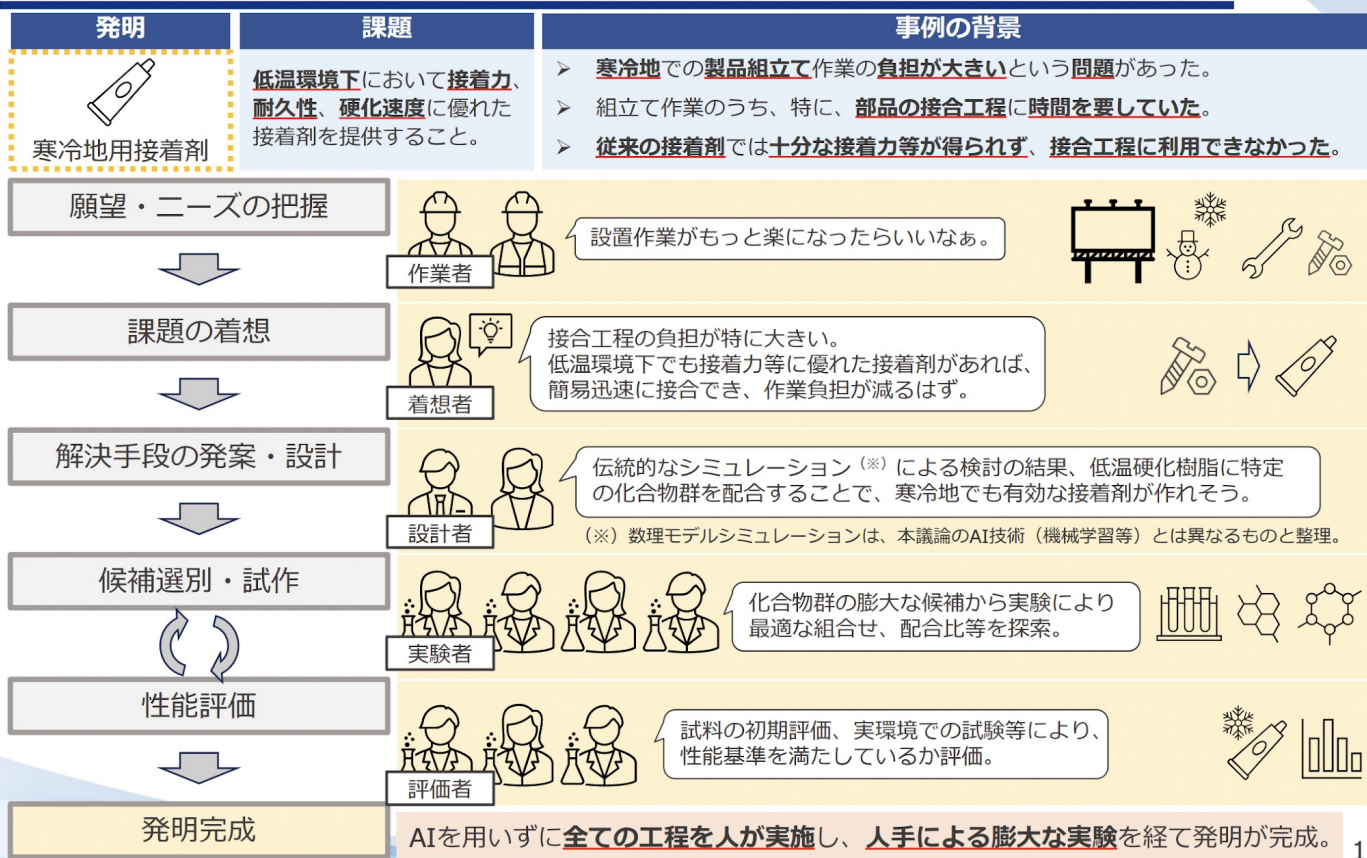
John M. Jumper
Google DeepMind
United Kingdom

Offord, C. (2024) "Protein designer and structure solvers win chemistry Nobel." Science, October 9, 2024.
<https://www.science.org/content/article/protein-designer-and-structure-solvers-win-chemistry-nobel>

AIとイノベーション

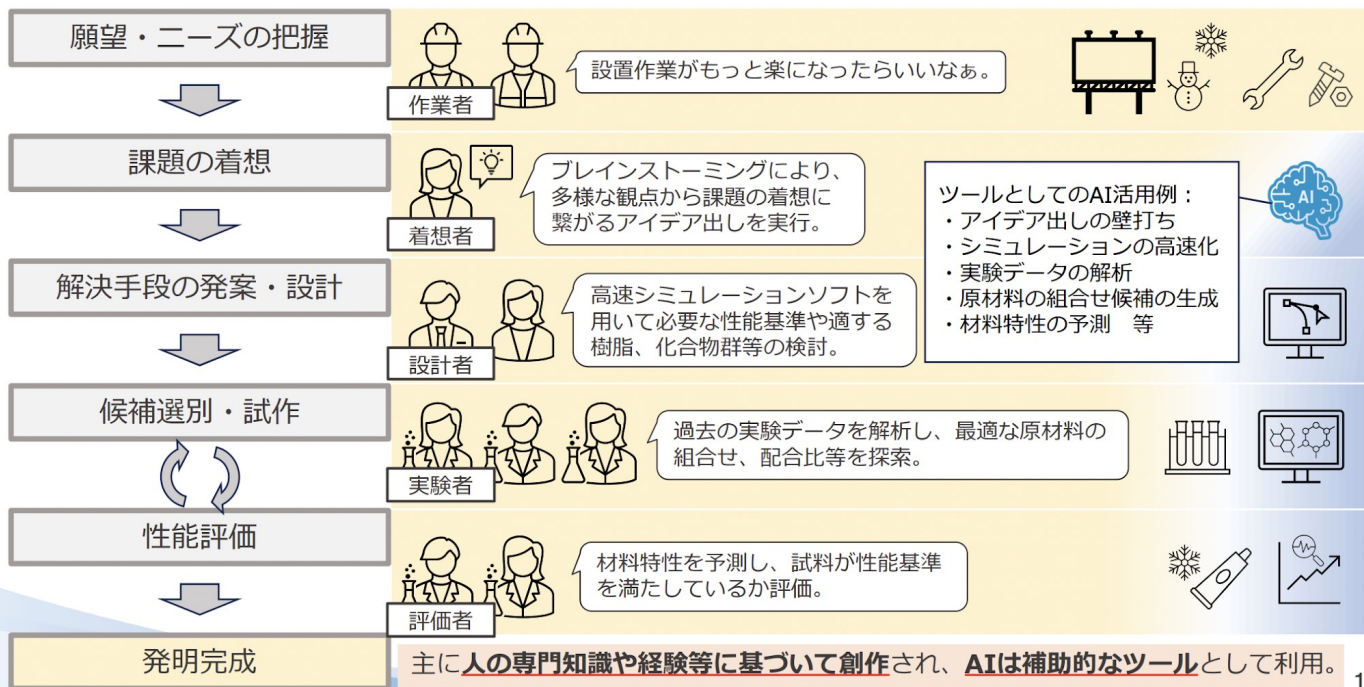
- ・ 2024年のノーベル賞
 - ・ 深層学習を活用したタンパク質の立体構造予測とデザイン（化学賞）
 - ・ ホップフィールドネットワークやボルツマンマシンと深層学習（物理学賞）
- ・ 既存業務の効率化だけでなく、新たな価値創造に貢献することへの期待
 - ・ タンパク質が問題になる、がんやアルツハイマー型認知症などの次世代治療が確立すれば、医療・介護のコストを抑制できる可能性
 - ・ 医学以外のさまざまな研究・開発分野での応用も：材料探索、半導体の設計、ロボット開発のための現実世界シミュレーションなど
- ・ 同時に、AIだけで自律的に「発明」をするのは、直近での実現可能性は低い

仮想事例 -寒冷地用接着剤-（（１）人のみによる発明）



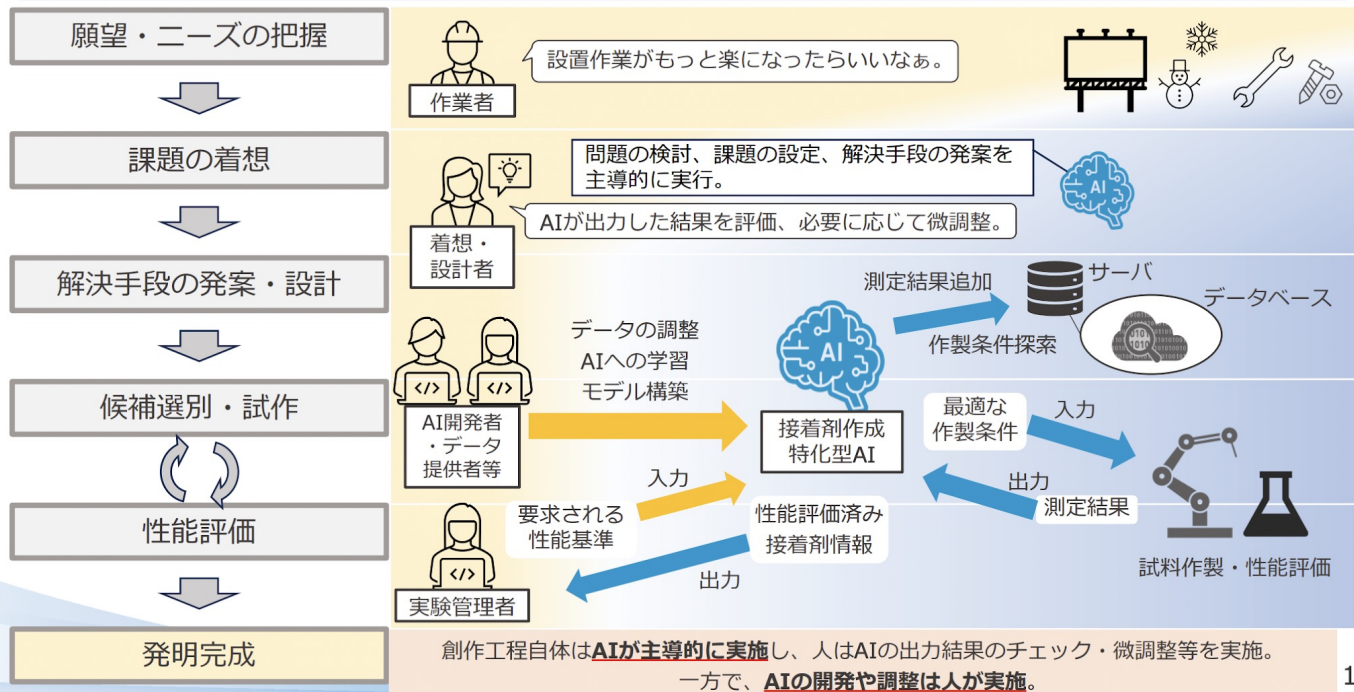
仮想事例 -寒冷地用接着剤-（（2）人が大部分を創作した発明）

- 各工程でAIをツールとして利用することは、現在も広く行われている。
- 発明完成に至るまでの全ての工程において、人が大部分に関与している。



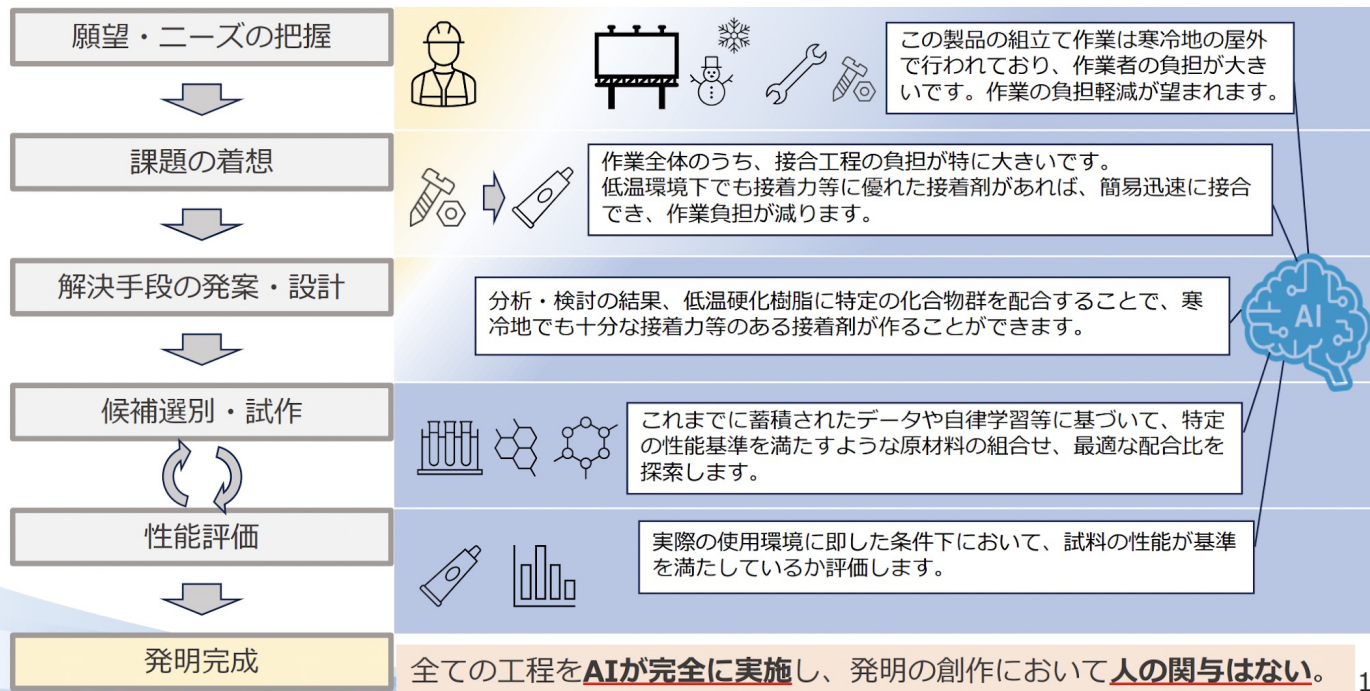
仮想事例 -寒冷地用接着剤-（（3）AIが大部分を創作した発明）

- 発明の大部分はAIが創作し、AI開発者やデータ提供者等はAI開発を通じて発明の創作に関与している。
- 調査研究等を踏まえると、近い将来に、この段階に到達する可能性がある。



仮想事例 -寒冷地用接着剤- ((4) (いわゆる) AI自律発明)

- 願望・ニーズの把握、課題の着想から性能評価まで、全ての工程をAIが実施。
- 調査研究等を踏まえると、この段階の実現は遠い未来であり、足下の実現可能性は低いと想定される。





AIと科学

“A I 駆動型研究を支えるオープンサイエンスを更に推進する”

AIと科学

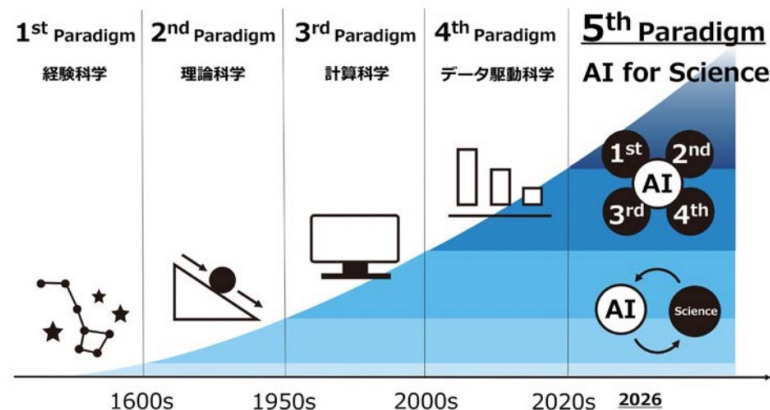
JST-CRDS (2026) 『AI for Scienceの動向2026』 CRDS-FY2025-RR-05, 2026年2月

<https://www.jst.go.jp/crds/report/CRDS-FY2025-RR-05.html>

JST-CRDS (2026) 『研究開発の俯瞰報告書 システム・情報科学技術分野』 CRDS-FR-S106-202602, 2026年2月

<https://www.jst.go.jp/crds/report/CRDS-FR-S/CRDS-FR-S106.html>

- 「第5の科学研究パラダイム」？
 - 第1パラダイム：経験科学（実験科学）
 - 第2パラダイム：理論科学
 - 第3パラダイム：計算科学
 - 第4パラダイム：データ駆動科学
 - 第5パラダイム：AI駆動科学？
- (A)(B)は、科学研究サイクルの各ステップでAIを活用するのに対して
- (C)は、AIを活用して科学研究サイクル全体を自動化(自律的実行)する

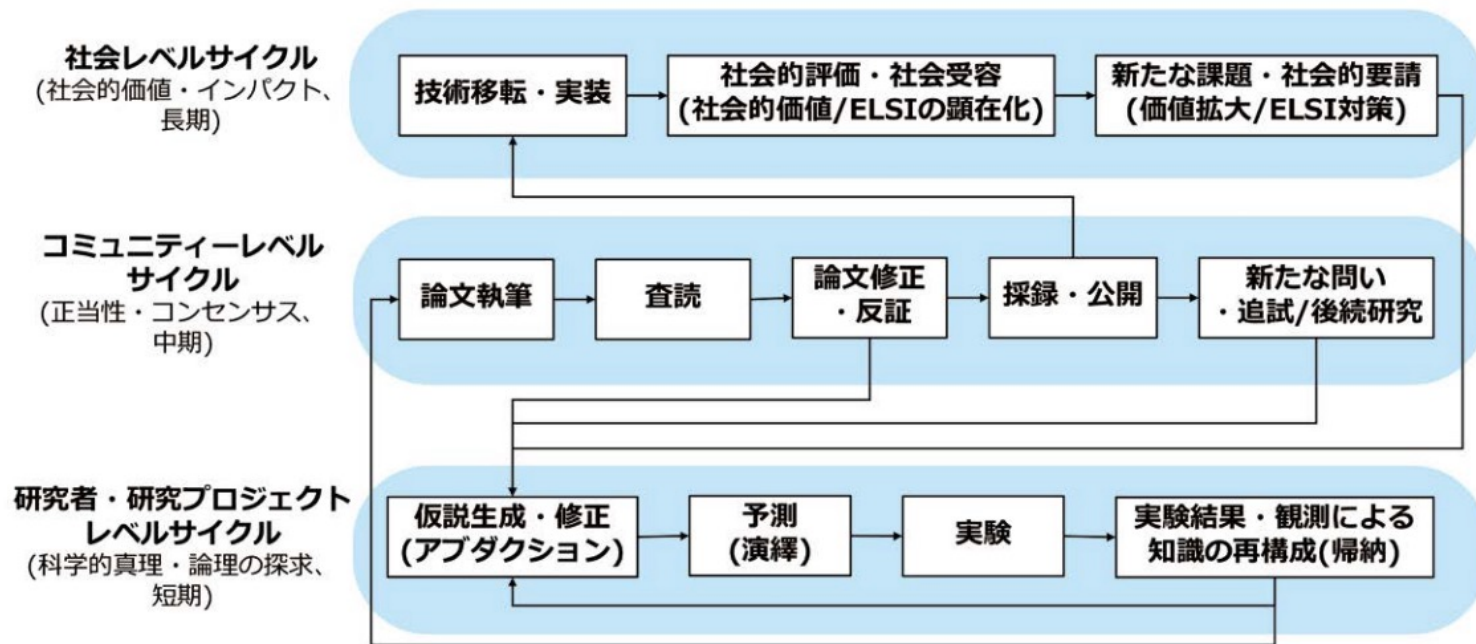


	人間のひらめき	コンピューターの活用	AI駆動	
演繹	第2の科学 理論科学	第3の科学 計算科学 (シミュレーション科学)	②	③ 第5の科学 AI駆動科学/ AIロボット 駆動科学
帰納	第1の科学 実験科学	第4の科学 データ駆動科学	①	

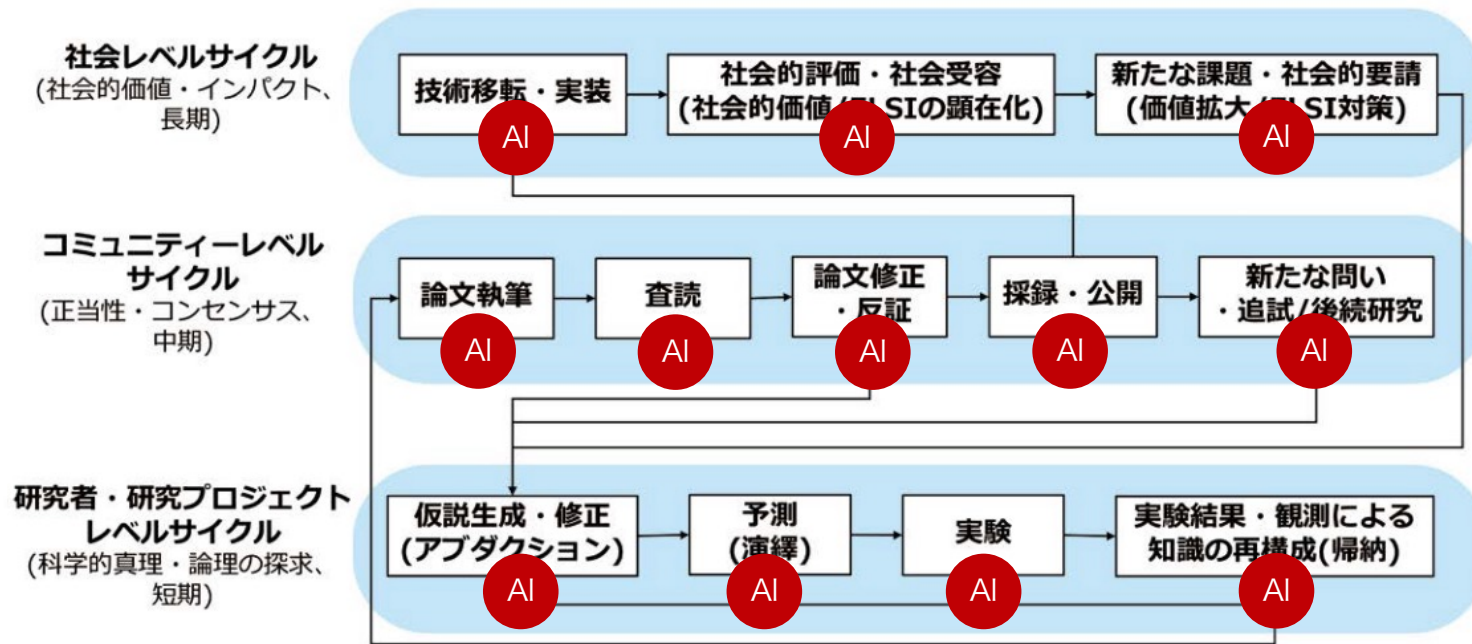
科学研究サイクルのあるステップでAIを活用

AIを活用して科学研究サイクル全体を自動化(自律的実行)

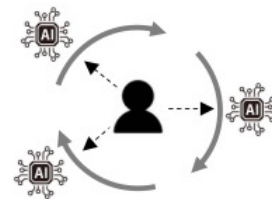
AIと科学研究サイクル



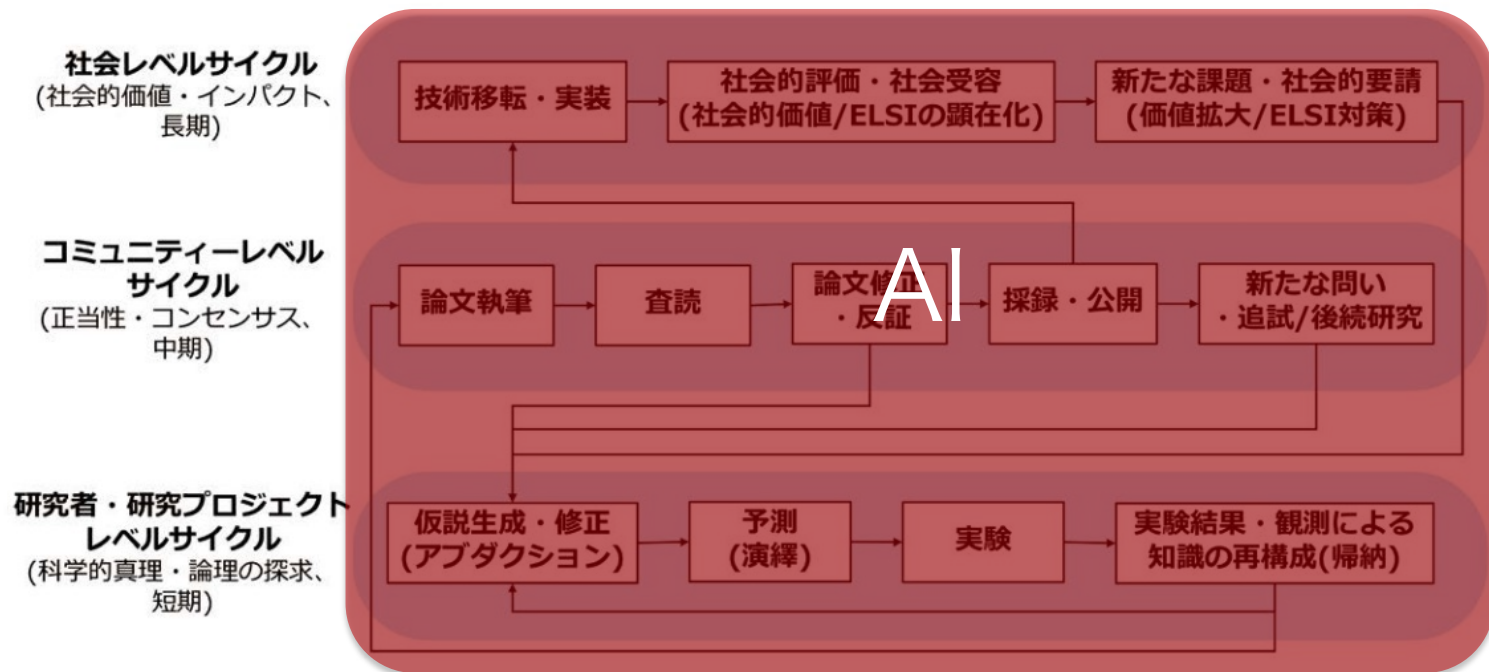
AIと科学研究サイクル：各ステップでAIを活用



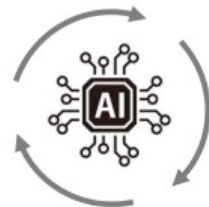
支援系AI4S



AIと科学研究サイクル：全体を自動化



自律系AI4S



JST-CRDS (2026) 『研究開発の俯瞰報告書 システム・情報科学技術分野』 CRDS-FR-S106-202602, 2026年2月
<https://www.jst.go.jp/crds/report/CRDS-FR-S/CRDS-FR-S106.html>

AI for Science で変わる科学研究

Before (過去)

- ・網羅的なリテラチャーレビューには**限界**があり、一定の制限範囲を設けたレビューを実施した上で仮説を推敲
- ・研究者の知見の範囲内での研究計画立案（知らないやり方はできない）
- ・手動での実験による、データのばらつき、時間及び人的リソースを踏まえた**限定された探索範囲**での実験の実施、再現性の問題
- ・人間の知覚範囲におけるデータ処理・分析と考察
- ・上記を経た上での論文の作成
例）生命・医学分野では、着想から論文化までの期間は約2年



現在

○大規模言語モデルの活用

データ収集の範囲拡大、時間の短縮
⇒情報収集の効率化

○ロボットによる自動実験

1つの作業を担当するロボットだけでなく、ロボット同士の連携や単独ロボットの高知能化等、AIとロボットで24時間365日実験を実行
⇒探索範囲の拡大



○スパコンによるシミュレーションデータの大量生成

⇒データ生成・分析の効率化

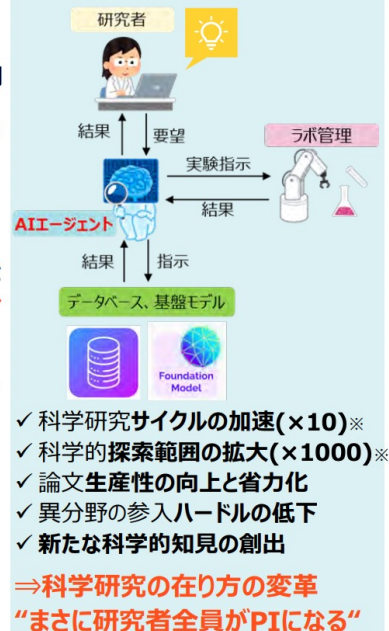


取組内容

- ・マルチモーダル化した科学研究向け**AI基盤モデルの開発**とその活用
- ・自動・自律実験環境等構築による**データの大規模・高速創出**
- ・科学者と実験とモデルを接続する**AIエージェントの開発**
- ・AI向けスパコン(GPU)など計算基盤の発展

After (将来)

科学研究サイクルを統括する
AIエージェントとの対話により、科学研究を遂行



※理化学研究所における個別の研究課題（創薬研究）を例とした試算



科学技術政策としてのAI for Science

“我が国の国際優位性・戦略的自律性を確保することで、自律性と信頼性を備えた研究国家として、AI for Science 先進国としての地位確立を目指す”

科学技術政策としてのAI for Science

- AIが産業競争力や研究力を左右するとの認識が広がる
 - AIが、印刷機、電気、インターネット等と並ぶ「汎用技術」になるとのナラティブ
- AI for Science関連の政策・施策を各国が推進
 - 米国が早期から強化
 - 日本も着手は早め

米国	2018年：DARPA「自動科学知識抽出」プロジェクト開始 2020年：エネルギー省（DOE）「AI for Science」報告書 2022年：DARPA「自動科学知識抽出・モデリング」プロジェクト開始 2023年：DOE「AI for Science, Energy, and Security」報告書 2024年：DOE「科学・安全保障・技術のためのAIフロンティア」計画 2025年：Genesis Mission創設の大統領令
欧州	2025年：「欧州におけるAI in Science戦略」 2025年：EU「欧州AI科学リソース」パイロットプログラム開始
中国	2025年：科学技術省「人工知能駆動型科学研究（AI for Science）」特別展開作業 2025年：北京市人工知能科学研究高品質発展加速行動計画
日本	2024年：文部科学省戦略目標「自律駆動による研究革新」、JSTさきがけプログラム開始 2024年：理化学研究所「科学研究基盤モデル開発プログラムTRIP-AGIS）」開始 2025年：文部科学省「AI for Scienceによる科学研究の革新」

米国「ジェネシス・ミッション」(2025年11月～)

- ・ AIで科学を加速する国家プログラム
 - ・ 10年間で科学研究・技術革新の生産性と米国の影響力を2倍にすることを目指す
- ・ 産官学の協働：米国主要企業も参画
 - ・ OpenAI、Anthropic、Google DeepMind、NVIDIA、Intel、AWS、Oracleなど
- ・ 有人月面着陸を成功させた「アポロ計画」に並ぶ位置づけとされる
 - ・ 背景に2025年1月の中国「DeepSeek」発表と「スプートニク・ショック」の比喩



Kratsios, M. [@mkratsios47]. (2025, November 24).
The Genesis Mission is launched! Big day for American Science and AI [Post]. X.
<https://x.com/mkratsios47/status/1993102181940314377>

米中のAIモデル開発競争

数ヶ月遅れくらい

1~2年遅れくらい

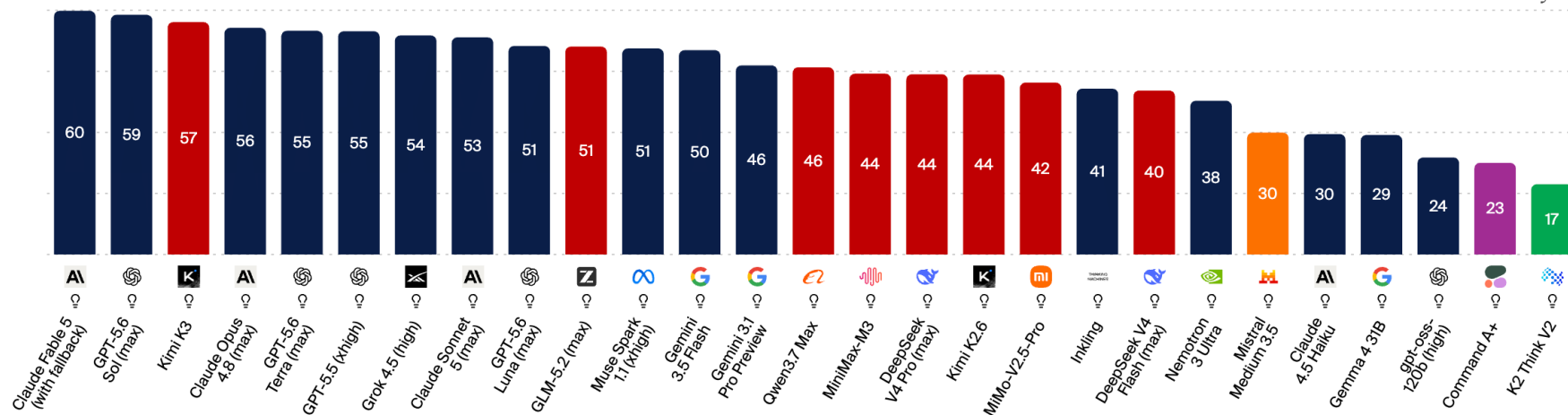
米国

中国

仏/加/UAE/日など

● United States ● China ● France ● Canada ● United Arab Emirates

Artificial Analysis



Artificial Analysis. (n.d.). Artificial Analysis Intelligence Index: By country [Interactive data dashboard]. Retrieved July 20, 2026.
<https://artificialanalysis.ai/?intelligence-category=country-analysis>

米国「ジェネシス・ミッション」と日本



- ・ 2026年6月、日本が初の国際パートナーとして参画することを発表
 - ・ 日本側は、文部科学省、経済産業省
 - ・ 日本と米国の研究者が、お互いの国の計算資源を、それぞれの国の研究者と同じ条件で利用することを確認(例：理化学研究所「富岳」等)
 - ・ 日米は今後5年間で10億ドル(約1600億円)を拠出、このうち日本からは5億ドル(約800億円)

文部科学省(2026)「日本のAI for Scienceの取組と米国の『ジェネシス・ミッション』との連携に向けた日米戦略的パートナーシップについて」2026年6月4日.
https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/kokusai/kyoryoku/mext_00015.html

AI for Science

- ・ 2026年3月「第7期科学技術・イノベーション基本計画」が閣議決定
- ・ 同月、文部科学省が「AI for Scienceの推進に向けた基本的な戦略方針」策定

AI for Science の推進に向けた基本的な戦略方針（概要）



文部科学省

- 「第7期科学技術・イノベーション基本計画」や「人工知能基本計画」、AIを巡る国際動向等を踏まえ、具体的な取組方針を整理。
- **今後5年間で集中改革期間**とし、具体的な **20のアクション**を設定して、大胆な投資により**スピード感**を持って取組を加速。
- 日本の強みを生かして、①戦略的な国際連携による世界を先導する研究開発、②新たなチャレンジとAI for Scienceの波及・振興、③これを支える次世代研究基盤の構築、④AIを高度に活用できる研究人材の育成等を、関係省庁等と連携して強力に推進。
- 研究環境と科学研究プロセスの革新により、**自律性と信頼性を備えた研究国家**として**AI for Science 先進国**の地位確立を目指す。

- 日本の強み**
- ▶ **情報基盤**：世界最高水準の情報流通基盤（SINET）・研究データ基盤（NII RDC）・計算基盤（富岳・富岳NEXT・HPCI等）
 - ▶ **研究基盤**：世界トップレベルの基礎科学力と多様な研究者層、世界最先端の研究装置群と大型研究施設、信頼性の高い実験・観測データの蓄積
 - ▶ **社会基盤**：世界有数の経済規模、精密な製造・計測技術・ロボティクス、すり合わせや暗黙知を含む現場知、AIに対する社会的・産業的な需要

目的 I. 科学研究の革新と科学的発見の加速・質の変革 II. 研究力の抜本的強化と科学の再興 III. 国際的優位性・戦略的自律性の確保

中長期的な取組目標 科学基盤モデル/エージェントやAI駆動ラボの活用により重要技術領域の先端的成果創出及び研究開発期間を1/10に

今後5年間の目標 AI for Scienceの推進により、日本の科学研究における国際優位性の確保



3年後までに、新素材開発速度10倍の潜在力を有するAI駆動ラボシステムを開発。

将来は、AI駆動ラボシステムを用いて、我が国企業が国際的サプライチェーン上不可欠なマテリアルを量産する。



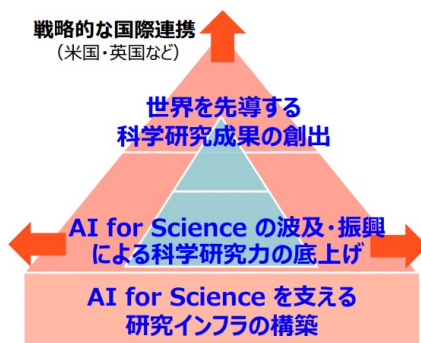
3年後までに、大規模なデータ取得を通じて、高機能なバイオ製品の高効率設計を実現するバイオ生成基盤モデルを開発。

将来は、仮想細胞・生体モデルや、植物、動物、ヒト・臓器等の「デジタルツインモデル」を実現し、高精度かつ高効率なバイオ製品開発や創薬等へ貢献する。



3年後までに、AIIエージェント群による、最先端大型研究施設・研究装置からの大量・高品質データ産出や、仮説検証・実験の自動化・自律化を実現。

新規性の高い研究を探索的に行うシステムの開発を通じて、科学研究の新しい方法論を示す。



（具体的な取組内容）

①研究力・人材
AI高度人材等の育成
×
AI活用促進

②計算資源
戦略的増強
×
利便性向上

③研究データ
高品質データの創出
×
データの一体的運用

- ・ AI for Science のあらゆる分野での波及・振興と日本の強みを生かした重点領域の設定・投資を両輪で推進、世界トップ層との戦略的国際共同研究を推進
- ・ AIの基礎研究含むAIそのものの研究の強化（リスク対応含む）
- ・ 国際連携・産学連携を通じ、AI・計算資源・データに精通した人材の参画・育成、技術専門職の育成・確保、評価や処遇の見直し
- ・ 世界最高水準の次世代AI・HPC融合プラットフォーム「富岳NEXT」の開発
- ・ AI共用計算資源の戦略的な増強と利便性（機動性、アクセス性、相互運用性）の向上
- ・ 産業界との連携及び国際連携を通じた計算資源の有効活用
- ・ 戦略的価値の高いデータセットの特定・構築
- ・ 自動化・自律化した研究設備等の整備と研究データ創出プロセスの標準化
- ・ AI時代に即した次世代情報基盤の構築・活用、データの一体的運用

※「AI for Scienceの推進におけるAI利活用に係る研究データの取扱いに関する考え方」についても整理。



AI for Science と ELSI

“研究者がより創造的な活動に専念できる環境を実現”？
“世界をリードする信頼性のある科学的成果を継続的に創出”？

AI for Science で変わる科学研究

Before (過去)

- 網羅的なリテラチャーレビューには**限界**があり、一定の制限範囲を設けたレビューを実施した上で仮説を推敲
- 研究者の知見の範囲内での研究計画立案（知らないやり方はできない）
- 手動での実験による、データのばらつき、時間及び人的リソースを踏まえた**限定された探索範囲**での実験の実施、再現性の問題
- 人間の**知覚範囲**におけるデータ処理・分析と考察
- 上記を経た上での論文の作成例）生命・医学分野では、着想から論文化までの期間は約2年



現在

○大規模言語モデルの活用

データ収集の範囲拡大、時間の短縮
⇒情報収集の効率化

○ロボットによる自動実験

1つの作業を担当するロボットだけでなく、ロボット同士の連携や単独ロボットの高知能化等、AIとロボットで24時間365日実験を実行
⇒探索範囲の拡大



○スパコンによるシミュレーションデータの大量生成

⇒データ生成・分析の効率化

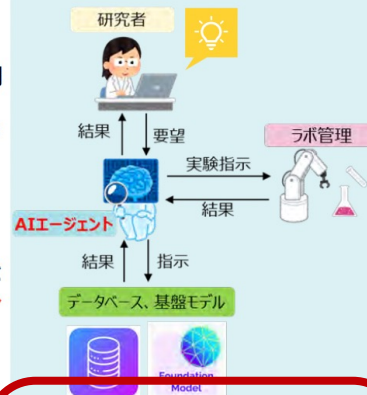


取組内容

- マルチモーダル化した科学研究向け**AI基盤モデルの開発**とその活用
- 自動・自律実験環境等構築による**データの大規模・高速創出**
- 科学者と実験とモデルを接続する**AIエージェントの開発**
- AI向けスパコン(GPU)など計算基盤の発展

After (将来)

科学研究サイクルを統括する**AIエージェントとの対話により、科学研究を遂行**



- ✓ 科学研究サイクルの加速(×10)※
- ✓ 科学的探索範囲の拡大(×1000)※
- ✓ 論文生産性の向上と省力化
- ✓ 異分野の参入ハードルの低下
- ✓ 新たな科学的知見の創出

⇒**科学研究の在り方の変革**
“まさに研究者全員がPIになる”

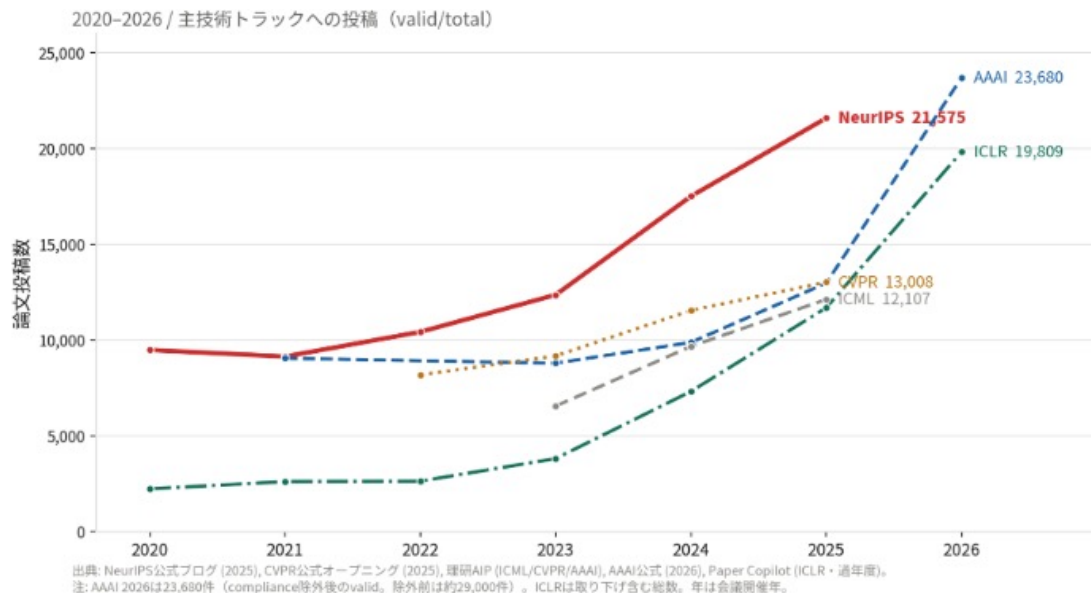
※理化学研究所における個別の研究課題（創薬研究）を例とした試算

- ✓ 科学研究**サイクルの加速(×10)※**
- ✓ 科学的**探索範囲の拡大(×1000)※**
- ✓ 論文**生産性の向上と省力化**
- ✓ 異分野の参入ハードルの低下
- ✓ **新たな科学的知見の創出**

⇒**科学研究の在り方の変革**
“まさに研究者全員がPIになる”

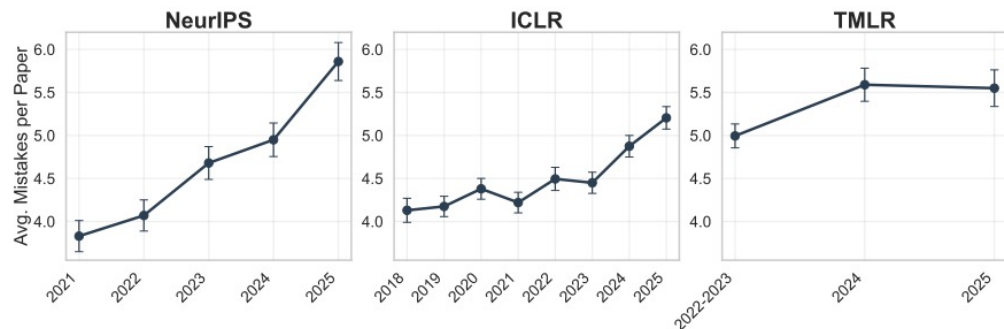
現場で起きていること：査読制度の危機

- 論文数の急激な増加
- 査読負荷の増加
- 査読制度の破綻と再構築
 - ICLR 2026では、査読の21%(約15,899件)が完全AI生成との判定
 - NeurIPS 2026では、LLMが支援した査読の効果とリスクを大規模RCTで検証
 - ICML 2026では、相互審査(reciprocal review)」制を導入し、投稿者全員に査読も課す



現場で起きていること：品質・信頼性の低下

- ・ トップ・カンファレンスでも参考文献のハルシネーション
 - ・ NeurIPS 2025では、3～5名の査読を経た採択論文53本に幻覚引用100件（約1%）が混入
 - ・ ArXivは、2026年5月、AIによるハルシネーション参考文献や、明白な生成AI使用痕跡を含む投稿について、著者を1年間投稿禁止とする厳罰方針を提示
- ・ 参考文献だけでなく、1論文当たりの本文の誤りの数も増加？



Bianchi, F., Kwon, Y., Izzo, Z., Zhang, L., & Zou, J. (2025) "To Err Is Human: Systematic Quantification of Errors in Published AI Papers via LLM Analysis." arXiv:2512.05925. <https://doi.org/10.48550/arXiv.2512.05925>

現場で起きていること：既存の問題の増幅

- ・ 既存のバイアスの増幅

- ・ AIモデルは人間の引用パターンを学習するため、革新的な研究を見落としやすい一方、すでに引用数の多い論文や権威のある研究者を過大に提示する傾向（「マタイ効果」）
- ・ 資金提供者は、どの手法や研究者が「重要」とみなされるかという選別を、暗黙のうちにAIモデルに委ねるようになる

- ・ 再現性の低下

- ・ 少数サンプルにAIモデルが過剰適合して、別の集団のデータでは通用しない（汎化しない）
- ・ AIブームに乗って肯定的な結果を急いで大量に発表する風潮が、質の低い研究を増やす

Lin, Z. (2025) "AI chatbots are already biasing research—we must establish guidelines for their use now." *Nature*, 645, 285. <https://doi.org/10.1038/d41586-025-02810-5>
Ball, P. (2023) "Is AI leading to a reproducibility crisis in science?" *Nature*, 624, 22–25. <https://doi.org/10.1038/d41586-023-03817-6>

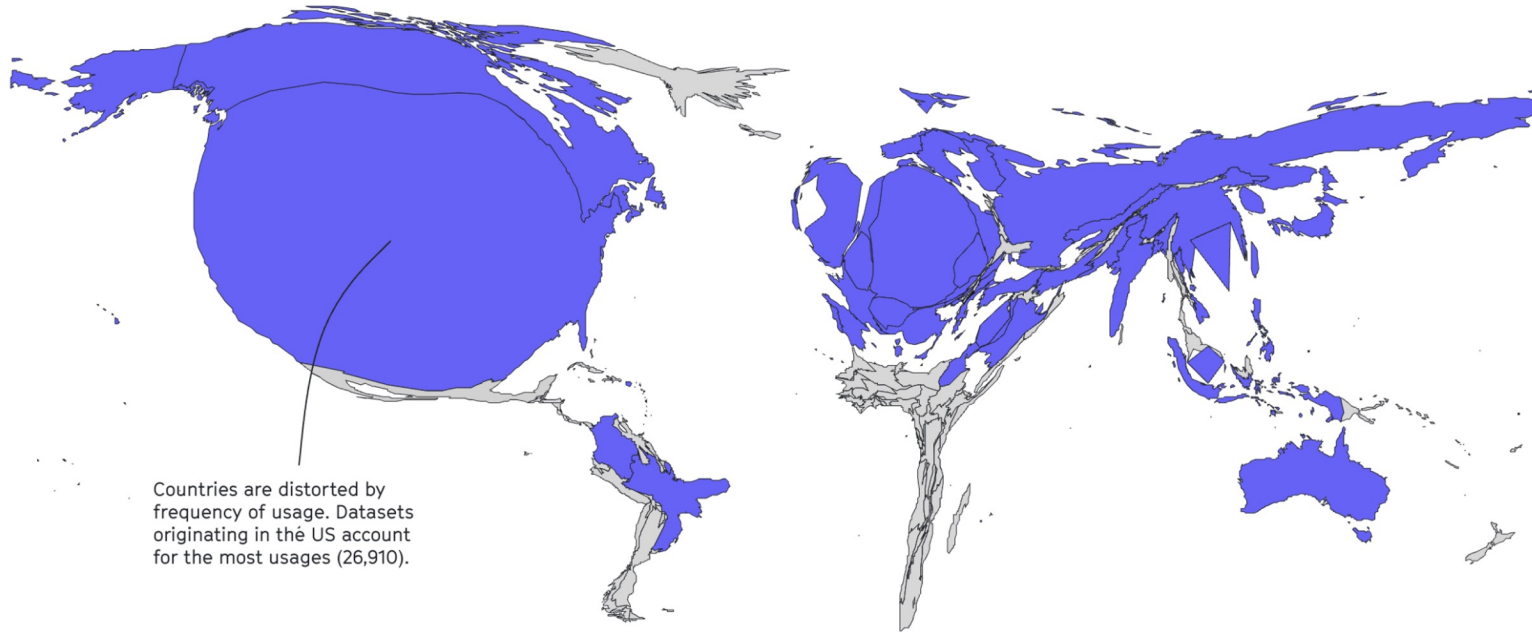
AIとバイアス



Bianchi, F, Kalluri, P, Durmus, E, Ladhak, F, Cheng, M, Nozza, D, Hashimoto, T, Jurafsky, D Zou, J, and Caliskan, A.
Easily accessible text-to-image generation amplifies demographic stereotypes at large scale.

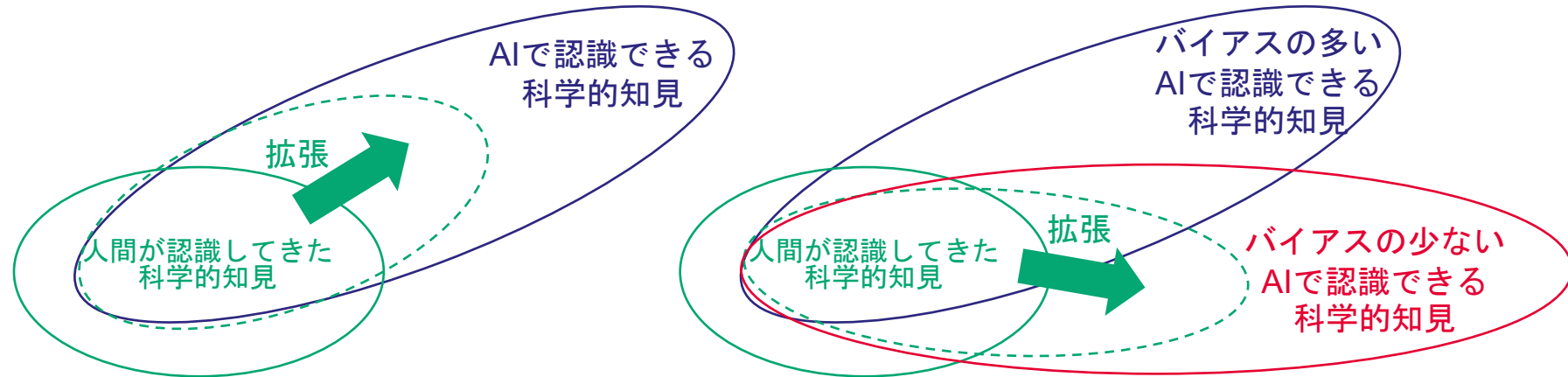
Frequency of dataset usage by country

● Usage of datasets from here ● No usage of datasets from here



バイアスとAI for Science

- ・ AI利用が、研究力や新しい知見の探索を左右されている
- ・ バイアスが大きいと、新しい知見の方向性が歪んでしまうのではないか？
- ・ データ不足により、既存の／現実の格差が助長されてしまうのではないか？



※上記は仮で作ったモデル図であり、あくまでイメージ。包含関係や大きさは今後検討を要する。

現場で起きていること：対象選択の誤り？

“AI for Scienceへの関心が高まっている昨今。研究の本体よりも先にAIにやってほしいことがないでしょうか？ 研究費申請や報告書の作成、学会・イベント運営といった、研究アドミニストレーション業務です”

“今の研究者やURA、研究所のスタッフはとても忙しく、慢性的にスタッフは不足し、猫の手も借りたいのが現状なはず。こうした研究アドミニストレーション（RA）の領域こそ、AIが力を発揮できるのではないのでしょうか”

メタサイエンス研究会(2026)「第7回メタサイエンス勉強会：AI for RA—研究アドミニストレーション業務はどこまでAI化できるか？」2026年5月20日。
<https://sites.google.com/view/metascience/過去の活動/20260520>

開催記録

Meta
Sci

2026.5.20 開催

AI for RA

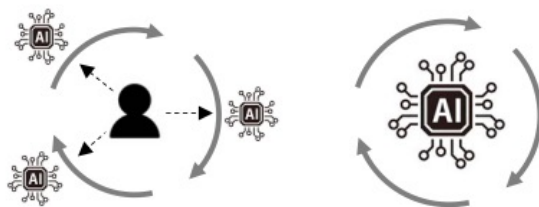
研究アドミニストレーション業務は
どこまでAI化できるか？

【共催】

- メタサイエンス研究会
- RA協議会スキルプログラム専門委員会テーマ別勉強会「生成AIとURA業務」

今後生じること：アイデンティティの危機

- ・研究者は論文の執筆者から編集責任者になる？
- ・研究者全員がPI（Principal Investigator: 研究主宰者）になる？
- ・でもそれって楽しいの？

支援系AI4S**自律系AI4S**

- ✓ 科学研究サイクルの加速(×10)※
- ✓ 科学的探索範囲の拡大(×1000)※
- ✓ 論文生産性の向上と省力化
- ✓ 異分野の参入ハードルの低下
- ✓ 新たな科学的知見の創出

⇒ 科学研究の在り方の変革
“まさに研究者全員がPIになる”

今後生じること：「理解」の危機

- ・機械学習を用いたAIシステムで予測に成功しても、なぜそれが当たったか理解できない
- ・従前の科学では作用機序の「理解」を重視してきたが、今後は「ブラックボックス」でも許容する？
 - ・もちろん、AIの説明可能性を高める技術 (XAI) も開発されている
 - ・しかし、AIが有益な予測を生み出すにつれて、理解が重視されなくなる可能性も
- ・科学という営みは、高度に制度化された知的活動として発展してきた
- ・人間が遂行することを前提に作り上げられた従来の科学の制度が、AIの導入で揺らいでいるなら、制度を作り直すべきとの主張
 - ・ 呉羽真(2026)「〈異質な科学〉と〈科学の疎外〉——AIが科学にもたらす変化の哲学的含意」『科学』96(1), 岩波書店, 25–28頁.

【再掲】 Today's Goal

「第7期科学技術・イノベーション基本計画」（令和8年3月27日閣議決定）の AI for Science に関する記述について、理解を深め、説明できるようになる：

近年、A I を科学研究に組み込む「AI for Science」が、創造性・効率性などの観点で科学研究の在り方に急速かつ抜本的な変革をもたらしつつある。

A I 駆動型研究を支えるオープンサイエンスを更に推進するとともに、我が国の強みを生かした分野横断的・組織横断的な「AI for Science」の実装により、日本全体で知の生産性を向上させ研究者がより創造的な活動に専念できる環境を実現するとともに、世界をリードする信頼性のある科学的成果を継続的に創出し、我が国の国際優位性・戦略的自律性を確保することで、自律性と信頼性を備えた研究国家として、AI for Science 先進国としての地位確立を目指す。

そのため、AI for Science の推進に向けた基本的な戦略方針も踏まえつつ、迅速かつ強力に取り組むことで、研究の効率性・生産性を向上させ、研究者の創造性を最大化させることが重要である。



Thanks!